

学生時代は、情報学でありながらほぼ数学の分野ともいえる研究に携わっていました。研究自体は紙とペンさえあればできるもので、改めてプログラムを作成して研究するようになったのは、北海道大学で研究員として勤務していたときでした。その後、同大学で生物学と情報学を融合したバイオインフォマティクスという分野に携わることになり、現在に至るまで研究を行っています。

また本学に着任する前は、滋賀県の長浜バイオ大学に勤めており、大学名の

## 存在感高めるAI技術

い、いわゆる一般的な機械学習や統計学を用いた研究にも取り掛かり始めました。

このような混然一体とした感じが、私の研究の特徴にもなります。

最初にバイオインフォマティクスの研究についてご説明します。私が15年程前から取り組む生物学データの研究は、実験技術の向上に伴って得られるデータ量が一気に増加し、近年急速に研究が進んでいます。その象徴的な研究分野がバイオインフォマティクスです。これは生命科学と情報科学を融合した分野の一つで、例えばゲノムをはじめとする生体分子の構造などを数値化し、分析します。この研究を深化させるこ

また、将棋や囲碁でのAIの台頭が話題になっていますが、これらも情報解析を活用した研究です。情報解析によってAIが編み出した勝ち筋が新たな戦術として認められ、人にフィードバックされるという現代ならではの流れが生まれました。ほかにも小説、音楽、料理など取り組むテーマは多岐にわたります。

こうした社会課題に直接的に関わる大きなテーマから、この分野は誰にも負けない」という自分の興味・関心の深いニッチな分野まで、どのような分野であってもデータを突き詰めることで研究対象になり得るという点が情報解析の醍醐味です。

研究室運営をされていて感じるのは、成績が良い学生よりも、目を見張る成績ではなくとも趣味に没頭している学生が、研究の進捗（しんちやく）とともに大きな成長を見せることがよくあることです。一芸に秀でるといってこそ才能というものでしょうか。

# 好みの分野を

## データ解析

通り生物学と関係のあるバイオインフォマティクスの研究を行っていました。一方で生物学とは関係のない



名城大学情報工学部准教授  
米澤 弘毅

とで、新型コロナウイルス感染症に関連する遺伝子群を特定できたり、疾病の予防、生活改善などの道筋を見出すことにより健康寿命の延伸に貢献したりと、未来の暮らしを変える可能性を秘めています。

バイオインフォマティクス以外の研究については、エンタメやスポーツに関するデータをもとに解析手法を設計し、情報解析を行うことで、これまでにはない視点や新たな発見を導き出

よねざわ・こうき 機械学習  
バイオインフォマティクス。京都大学大学院情報科学研究科。博士（情報学）。1976年生まれ。

